

コウライギギとダントウボウの最新(2020年代)の生息状況

萩原富司(土浦の自然を守る会)

外来魚は捕食等により在来生物群集へ深刻な影響を及ぼすとともに、これに特異的に寄生する、寄生生物がとりついたまま持ち込まれることが多い。これら寄生生物についても在来生物に寄生虫症などの負の影響を及ぼす可能性がある。筆者が報告したダントウボウ *Megalobrama amblycephala* (萩原 2017) についてもすでに吸虫類ダントウボウユビガタワムシ *Dactylogyrus petruschewskyi* がエラに寄生していることが報告されている (Nitta *et al.* 2020)。特定外来生物カワヒバリガイとともに淀川水系に侵入した尾崎腹口吸虫 *Proisorhynchoides ozakii* は利根川水系にも侵入していることが明らかになり、カワヒバリガイを感染源とし、在来魚や国外・国内由来の外来種の淡水魚の鰭やその基部に感染することが分かっている (Hayashi *et al.* 2022)。

筆者らが報告した当時、コウライギギ *Tachysurus fulvidraco* (荒山ほか 2012) ダントウボウはすでに霞ヶ浦において世代交代が認められるものの当時は侵入初期であり「まれに採捕される見慣れない外来魚」であった。しかし前述のように外来魚は在来生物群集に影響を及ぼす以外に、それに寄生して持ち込まれた寄生生物の影響も危惧されるため、個体数増加や生息範囲の拡大状況など侵入後のモニタリングも重要と考えられる。

今回は霞ヶ浦周辺において筆者らが行っている魚類調査や魚類観察会を通じて得られた上記 2 種の利根川流域での侵入後の生息状況について報告する。

1. コウライギギ

2008 年に初めて霞ヶ浦で採捕され (荒山ほか、2012)、その後同じ利根川水系内で分布を広げ、渡良瀬遊水地 (新田ほか、2017) や手賀沼 (手賀沼水生生物研究会 HP)、印旛沼 (石田ほか、2020) からも発見された。そのほか印旛沼を水源とする亀成川 (亀成川を愛する会、未発表)、手賀沼に接続する農業用水路 (手賀沼水生生物研究会、未発表) などでも、稚魚や成魚がしばしば確認されている。2021 年 8-9 月の筆者による霞ヶ浦に接続する農業用水路におけるアカムシを用いた釣獲調査では 8 時間の努力量(時間・人・竿 1 本)において総計 66 個体の魚が得られ、そのうち 10 個体(約 15%)がコウライギギの若魚であった。

コウライギギは霞ヶ浦で 2008 年 (荒山ほか 2012)、利根川中流部の渡良瀬遊水池周辺で 2009 年、印旛沼全域に 2018 年(石田ほか 2020)に確認されており (新田ほか 2017)、すでに利根川中・下流域に拡散していると考えられる。

2. ダントウボウ

2009 年に霞ヶ浦の南部江戸崎入りで採捕され、その後 2017 年に同じ霞ヶ浦東部の桜川でも採捕された。2021 年 5 月の霞ヶ浦北部高浜入りにおける釣り師への聞き取りによれば、2020 年ごろから霞ヶ浦全域で普通に釣獲されるとのこと。2022 年 11 月の筆者による霞ヶ浦に接続する農業用水路における釣獲調査では 13 時間の努力量において総計 88 個体が得られ、そのうち 12 個体(約 14%)が新規加入と 1+のダントウボウであった。ダントウボウは霞ヶ浦と常陸利根川(HP)ではヘラブナ釣りで普通に釣獲される魚種となっている。